

5 第32軍司令部壕周辺の 各ポイントの解説

5.1 首里城

琉球文化・歴史の象徴である首里城。第32軍司令部壕が首里城地下に構築されたことで米軍からの砲爆撃を受け、貴重な文化財とともに焼失しました。



▲沖縄神社本殿／出典：那覇市歴史博物館

首里城は琉球王国の国王とその家族が居住した王宮であり、王国統治の行政機関である首里王府の中心でもありました。首里城の正殿は14世紀ごろに創建されたとされる琉球王国最大の木造建築でしたが、これまでに5回の火災に見舞われ、そのたびに再建を繰り返してきました。琉球王国の象徴として、政治や経済、文化の中心地としての役割を果たしてきました。1879年（明治12年）に琉球王国が沖縄県となった後は、敷地内に多くの学校が置かれ学問の地となりました。

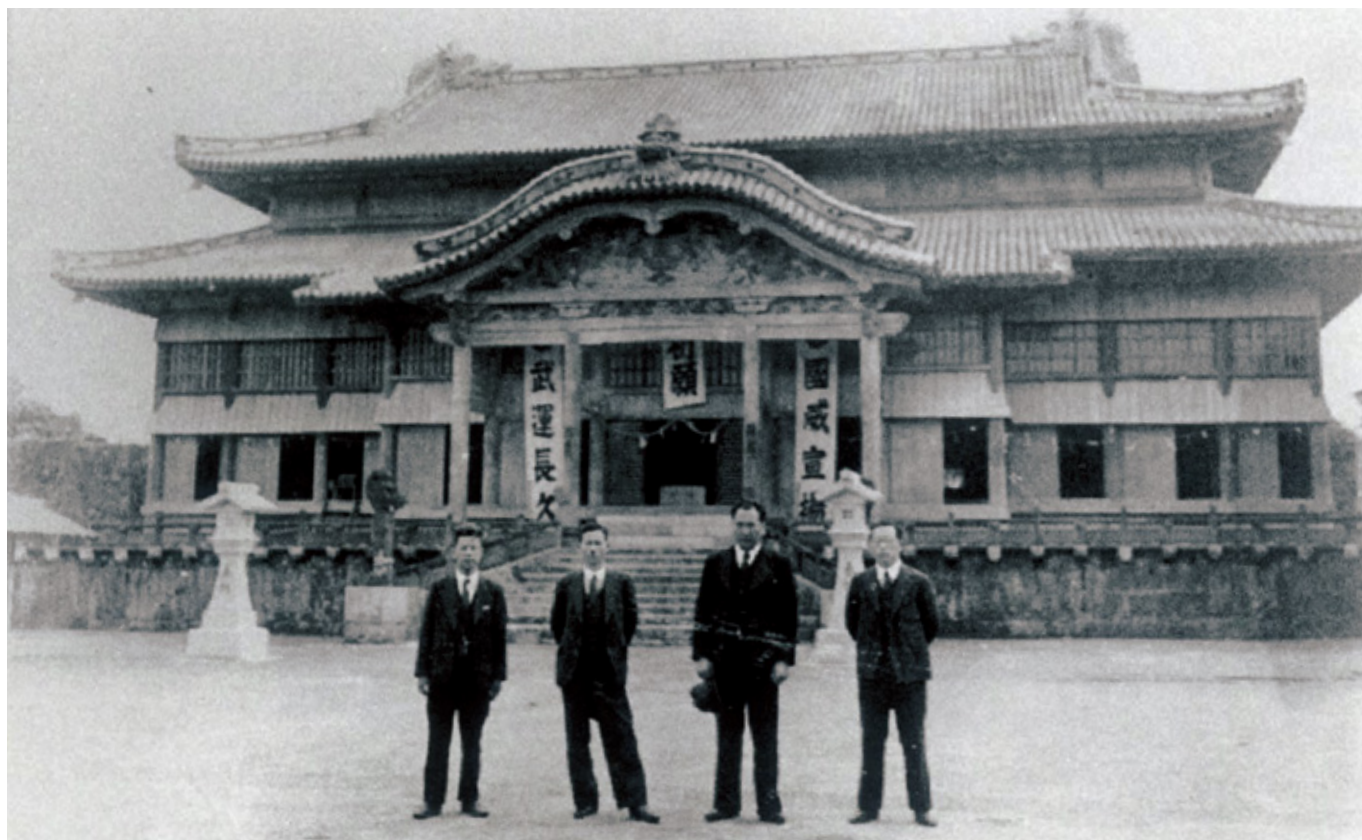
1925年（大正14年）、老朽化していた正殿は「沖縄神社」の拝殿となりました。当時の古社寺保存法で城郭は対象外なので、保存のために社寺に変更したものです。

1944年（昭和19年）3月に第32軍が創設されると、同年7月ごろから実戦部隊が次々と配備され、首里城周辺に多くの陣地壕も建造されました。そのため、首里城周辺には沖縄戦の痕跡が現在も数多く残っています。

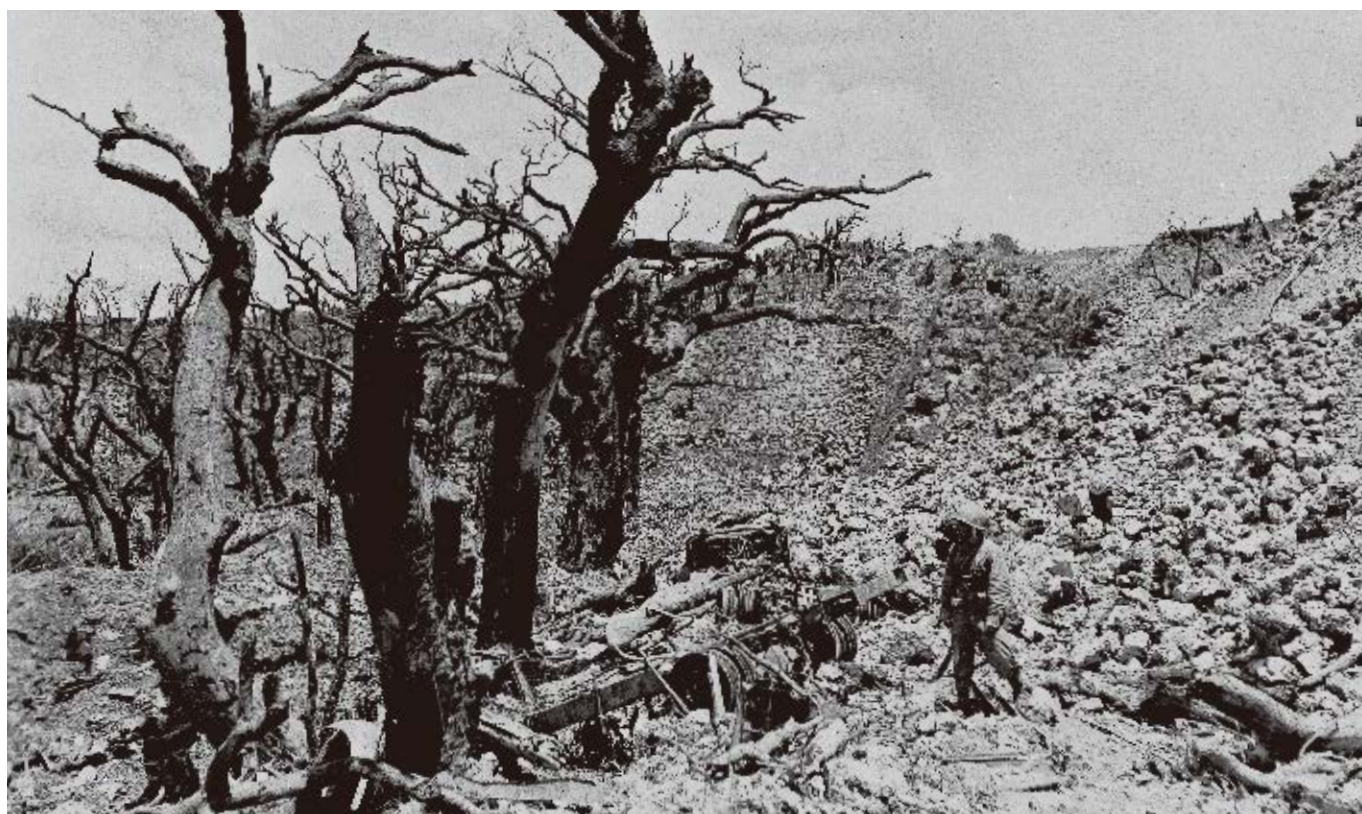
1945年（昭和20年）に沖縄戦で焼失した後、1950年（昭和25年）から琉球大学のキャンパスとして跡地利用されましたが、1984年（昭和59年）に琉球大学が西原キャンパスへ移転したのちには首里城の復元事業が推進され、1992年（平成4年）に首里城公園として開園しました。復元された首里城は18世紀以降の姿がモデルとなっています。

2019年（令和元年）10月31日に正殿など7棟が焼失する火災があり、現在は再建の工事が進められています。2026年（令和8年）には正殿の復元が完了する予定です。

5. 第32軍司令部壕周辺の各ポイントの解説



▲首里城正殿は、1925年から沖縄神社拝殿として使用されていた（撮影年不明）／出典：那覇市歴史博物館



▲廃墟と化した首里城の瓦礫の山〔1945年（昭和20年）5月29日〕／出典：沖縄県公文書館

そのひゃんうたきいしもん

5.2 園比屋武御嶽石門

世界遺産に登録されている園比屋武御嶽石門も沖縄戦で一部破壊され、戦後に復元されました。



国王が外出する時に安全祈願をした礼拝所です。間得大君が斎場御嶽での儀式に出掛ける際もここで祈願しました。第二尚氏第3代・尚真王時代の1519年に創建され、竹富島出身の西塘が造りました。琉球石灰岩で造られた石門は、屋根の飾りなどに日本と中国の様式を取り入れた琉球の代表的な石造建築です。

1933年（昭和8年）に国宝に指定されましたが、沖縄戦で一部が破壊され、1957年（昭和32年）に復元されました。屋根の右半分の白い部分は米軍の砲爆撃でかろうじて残った創建時のもので、左半分は復元したものです。1972年（昭和47年）に国指定重要文化財に、2000年（平成12年）には世界遺産に登録されました。



▲戦前の園比屋武御嶽石門／出典：那覇市歴史博物館



▲戦後の園比屋武御嶽石門／出典：那覇市歴史博物館

5.第32軍司令部壕周辺の各ポイントの解説

このポイントに関する証言

大田昌秀さんの証言

「4月下旬のある日、午後の3時頃だった。突然、壕（留魂壕）の入口の方から『軍司令部の捕虜が逃げたぞ!』『皆で捕えろ!』という怒号が起こった。壕内は一度にわき立った。為すこともなく壕内で悶々としていた皆は、それと色めき立ち、素早く鉄帽をかぶった。この捕虜は若い米軍の飛行士で、飛行中を撃墜されて落下傘で降下したところを捕まったとのことだった。永いこと軍司令部に留置されていたので私たちも顔を知っていた。逃亡した捕虜は、首里城の守礼の門の傍らの、園比屋武御嶽の裏手にくらわれていた者らしい。軍司令部の内部に捕えられていただけに、逃亡に成功すれば一大事だ。是が非でも捕えなければならぬ。が、夕方近くなり、吾こそはと壕を飛び出た連中も一人残らず悄然と帰ってきた。見つけたが、足が早くとても追いつけなかったとこぼしていた。幸いに軍の厳しい捜索で、二日後に首里郊外の末吉部落の方でつかまえたという報があって、皆はホッとした。」

（出典：大田昌秀、外間守善（1953年）『沖縄健児隊』p19-21より抜粋）

比嘉正範さんの証言

「園比屋武御嶽のところにトンボ機の搭乗員が捕虜になっていると聞き、見に行った。ところがそのパイロットは現在のヒッピーそっくりの服装をしていた。ズボンはずそを切り取り、サンダルみたいな靴をはいていた。上衣も飛行服ではなかった。その捕虜はあかぎの木にしばられていた。かなり弱っていて時々、目を開けては『ミジュ、ミジュ』とつぶやいていた。ふびんに思っ水飲ませたところ、横から現れた兵隊に張りたおされた。『捕虜に水をやってはいかん。敵に水をやるのは利敵行為だぞ』とどなったので、われわれは早々に退散した。」

（出典：兼城一（2000年）『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録：証言・沖縄戦（上）』p142-143）

兼城一さんの証言

「園比屋武御嶽の立木にしばられていた捕虜は何人かいたようである。沖縄戦がはじまると、捕虜は後ろ手にしばられたまま砲弾のなかでさらし者にされた。」

（出典：兼城一（2000年）『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録：証言・沖縄戦（上）』p144）

高嶺朝勇さんの証言

「砲撃が鳴りをひそめたある夜、守礼の門の近くの園比屋武御嶽のところにきた時だ。大きなリヤカーの中からうめき声があるので近寄ってみると、縄でぐるぐる巻きにされた米兵捕虜だった。エビのように体をまげて転がっていた。繁多川上空で撃墜されたグラマン機のパイロットだった。しきりに『ミジュミジュ』とつぶやくようにいう。誰かが『水が欲しいといっているのではないか』といい、空き缶に水をくんできて飲ませてやった。うまそうに飲み終わると『サンキュウベリマッチ!』と礼をいった。」

（出典：兼城一（2000年）『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録：証言・沖縄戦（上）』p195-196）



▲現在の園比屋武御嶽石門。右側は創建時の屋根。左半分は米軍の砲撃で破壊された屋根を復元。

ちゅうこんひ

5.3 忠魂碑

首里城の歓会門手前の石垣の上に残されているのが忠魂碑です。沖縄戦での爆撃により碑も台座も削れてしまっています。

忠魂碑は「国のために忠義を尽くして戦死した」兵士を祀った記念碑です。沖縄でも全国と同様に日露戦争（1904～1905年）後から本格的に建立されました。1904年（明治37年）に内務省が1市町村1基の原則を打ち出し、文部省が学校の敷地を建立場所として認めたことから、学校での建立が定着するようになりました⁷。忠魂碑の前では戦士した兵士を慰霊するとともに、国威発揚、忠君愛国、武運長久を意識づける儀式が行われました。

戦後はGHQ（連合軍総司令部）の「神道指令」を受けて、1946年（昭和21年）11月に内務省が全国の忠魂碑などの破壊を命じましたが、本土と分離した沖縄には適用されませんでした。そのため、沖縄島や周辺離島、宮古島、石垣島に27の忠魂碑が残存しています⁸。

歓会門近くの斜面にある忠魂碑は旧首里市の忠魂碑ですが、建立年など詳細は不明です。砲撃を受けて碑も土台も原型をとどめないほどの残骸をさらして、第32軍司令部壕が置かれた首里での激しい戦闘を伝えています。



▲忠魂碑の位置



▲現在の忠魂碑の状態



▲戦前の首里の忠魂碑

／出典：「写真集首里城」（那覇出版）

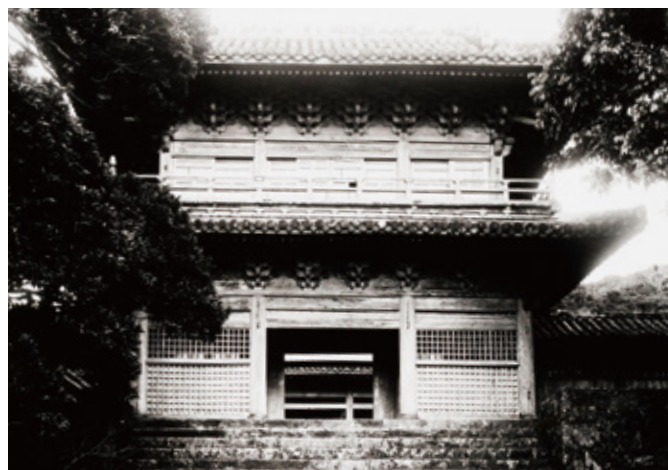
5.4 円覚寺跡

国指定史跡の寺院跡です。戦前は国宝にも指定されていました。同地には、その他にも重要文化財の旧円覚寺放生橋をはじめ4件の指定文化財が存在します。



▲焼失した仏殿に安置されていた仏像／出典:沖縄県立博物館・美術館

首里城の北に位置する臨済宗の寺院で、第二尚氏王統の菩提寺として、琉球王国の黄金時代を築いた尚真王が1494年に建立しました。仏殿は琉球建築の粋を極め、国宝にも指定されました。沖縄戦により放生橋を残して全て焼失しましたが、1967年(昭和42年)には総門が復元され、以後、放生橋・放生池の修理などが行われました。現在は総門と放生池のみが再建されています。また、2014年度(平成26年度)には木造瓦ぶき2階建ての三門の復元整備が始まり、2028年度(令和10年度)に完成する予定です⁹。



▲戦前の円覚寺三門／出典:沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館



▲円覚寺の放生橋と三門に続く階段。右上の建物は琉球大学農学ビル [1961年2月4日]／出典:那覇市歴史博物館

このポイントに関する証言

大田昌秀さんの証言

「あまりの砲撃の激しさに、私達はなすすべもなく、母校を始め、孔子廟、弁財天や国宝の円覚寺などが目の前で燃え上がるのを、壕(留魂壕)の口からただ黙って見ていなければならなかった。全く身を焼かれる思いだった。何百年もの歴史をもつ、沖縄の文化財が、あたかも藁小屋が燃えるように灰となっていくのを見て、私達は無念の涙をのんだ。

(出典:大田昌秀,外間守善(1953年)『沖縄健児隊』p8)

5.5 沖縄師範学校（男子部）の門柱跡

戦前の教員養成機関です。沖縄戦で学生は鉄血勤皇隊として動員されて多くが亡くなりました。現在は県立芸大のキャンパスになっており、門柱のみが建て直され残っています。



沖縄師範学校は戦前、教員を養成した官立（国立）の教育機関です。沖縄で初めて設立された中等教育機関で、大学のない当時は唯一の最高学府でした。前身は1880年（明治13年）に設立された「会話伝習所」で、本土との同化を目指し、共通語教育を重視した教員養成機関でした。その後、沖縄県立師範学校→沖縄県尋常師範学校→沖縄県師範学校と改称を経て、1943年（昭和18年）に官立沖縄師範学校となりました。予科2年、本科3年制で、予科は高等小学校卒業生、本科は予科修了生や中等学校卒業生が入学できました。一地域から数人しか入ることのできない「狭き門」の難関校でした。

沖縄戦では、予科2年生から本科3年生まで（15～18歳）の386人が1945年（昭和20年）3月31日から師範鉄血勤皇隊として戦場に動員され、「師範隊本部」「千早隊」「斬込隊」「野戦築城隊」に分けられました。6割近い226人が戦没しています¹⁰。首里当蔵町の龍潭ほとりにあった敷地には、現在、沖縄県立芸術大学が建っています。敷地内（旧円覚寺跡の向かい）には当時の正門の門柱が建て直されて残っていて、弾痕も確認できます。

沖縄師範学校女子部は現在の那覇市安里の栄町市場一帯に校舎があり、沖縄県立第一高等女学校と同じ敷地に併置されていました。両校の学徒は222人が戦場に動員され、のちに「ひめゆり学徒隊」と呼ばれました。



▲戦前の沖縄師範学校正門／出典：那覇市歴史博物館

5.第32軍司令部壕周辺の各ポイントの解説



▲沖縄師範学校（男子部）の門柱跡

このポイントに関する証言

安里繁さんの証言

「4月25日、今日は艦砲や爆撃が少ないようだと思うながら、いつもと同じように軍司令部まで伝令に行った。（中略）軍司令部の壕に飛び込んでからは、さすがに出る気になれず、壕内をあっちこっちうろついていた。爆弾の遠くで落ちる音を聞いても身の毛がよだった。壕の出口で、出ようか出まいかと尻込みしているとその衛兵に、『こらっ！何をぐずぐずして入口をふさいで立っているんだ』と毒気を帯びたドラ声をあびせられた。それで私は反発的に壕を飛び出し、城壁目指して走った。ようやく城壁まで駆けつけて、その下に伏せて動悸の静まるのを待った。数分経ってさあ走ろうとしたとき、爆音と共に妙な音が聞こえてきた。本能的に音の方を見た。あっ！ロケット弾だ。そして目標はわが師範学校だ。一、二、三・・・と数えた。次々と炸裂する。その音と共に60余年の歴史を誇る師範学校の赤い葺が、見る間に飛散していった。言い尽くせぬ寂しさで胸が一杯になり茫然と眺めていた。日が暮れる頃は、真赤な焰が天を焦がしていた。その焰は沖縄師範と元琉球王宅（尚家）の全てを焼き尽くしている焰だった。」

（出典：大田昌秀、外間守善（1953年）『沖縄健児隊』p 205-206）

5.6 留魂壕・新聞社壕

沖縄師範学校男子部が拠点とした壕。壕内の東側部分では「沖縄新報」（当時の新聞）の発行も行われていました。



首里城の物見台である東（あがり）のアザナの城壁に掘削された壕です。幕末の思想家・吉田松陰の「留魂録」にちなんで「留魂壕」と名づけられました。沖縄師範学校男子部と新聞社が利用していました。1945年（昭和20年）初頭から師範男子部の生徒や職員が掘り始め、3月中ごろに完成しました。壕は総延長130メートル、「ヨ」の字型で3か所の出入り口がありました。3月23日の上陸前空襲時から師範生らが避難するようになり、3月31日には壕の前に386人の生徒が集められ、師範鉄血勤皇隊が結成されました。

3月下旬から東側の壕は当時の新聞「沖縄新報」の印刷発行に使われ、第32軍司令部の南部撤退が決まった直後の5月25日まで続けられました。

「沖縄新報」は1940年（昭和15年）12月に沖縄日報、沖縄朝日新聞、琉球新報の3紙が統合されてできた新聞です。国の言論統制強化の方針のもと、一県一紙制度が進められていました。軍部の意向に沿い、戦意高揚をあおる記事を書き、県民を戦場に駆り立てました。留魂壕跡からは県の発掘調査で、新聞の活字が見つかりました¹¹。



▲1945年（昭和20年）4月29日発行「沖縄新報」

5.第32軍司令部壕周辺の各ポイントの解説



▲留魂壕全体



▲留魂壕の内部イメージ

5.7 ^{いり}西のアザナ

沖縄戦に関連する場所を見渡すことができる物見台です。北は読谷・北谷沖海岸、西は慶良間諸島、南は与座岳、八重瀬岳まで見渡せます。沖縄戦の戦線の推移を時系列に沿って紹介できます。



アザナとは物見台のことです。城郭の西端に築かれた物見台で、別名を「島添(しましー)アザナ」といいます。かつてはここに旗を立て、鐘をたたいて時刻を知らせていました。標高は約130mで、那覇市街や那覇港の様子、そして遠く水平線上には慶良間諸島を望むことができます。琉球王国時代は進貢船の到来やのろし信号を見分ける場所でもありました。

ここでは沖縄戦の全体像が説明できます。西側には1944年(昭和19年)の十・十空襲で焼けた那覇の町、疎開する学童らに乗せた対馬丸が出港した那覇港、1945年(昭和20年)3月26~27日に米軍が上陸した慶良間諸島、沖縄島を取り囲み約1,500隻の米軍艦船が浮かんでいた海、5月に日米が激しく戦ったシュガーローフが見えます。北側には、4月1日に米軍が上陸した読谷・北谷海岸、激戦地となった前田高地が、南に目を転じると日本軍が最後の抵抗をした八重瀬岳や与座岳が見渡せます。



◀1945年(昭和20年)
6月のシュガーローフ・ヒルの風景
(現在の那覇市新都心地区)
／出典: 沖縄県公文書館